

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03287

研究課題名(和文) 縄文文化の現代的利用におけるローカリティとナショナルリティの節合様態の人類学的研究

研究課題名(英文) An Anthropological study on the articulation of locality and nationality in the contemporary utilization of Jomon Culture(s)

研究代表者

古谷 嘉章 (FURUYA, Yoshiaki)

九州大学・比較社会文化研究院・教授

研究者番号：50183934

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：近年、殊に2010年代以降、縄文遺跡群の世界文化遺産登録推進運動から一般人の間での土偶ブームに至るまで、日本各地で様々な目的の下に縄文文化(のモノ)の活用の活発化がみられる。文化人類学的現地調査を中心とする本研究において、そうした「縄文文化の現代的利用」の重層的性格が明らかにされた。すなわち、「単一の縄文文化」を継承する「単一の日本」が一貫して強調される一方で、草の根レベルでは縄文時代の文化的多様性を参照して地域的アイデンティティが構築されており、「縄文文化の現代的利用」のそれぞれの事例でローカル、リージョナル、ナショナルいずれかのレベルの縄文文化が前景化し、様々な仕方で節合しているのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本列島において1万年以上続いた縄文文化については、三内丸山遺跡など20世紀後半に相次いだ注目すべき発見を受けて、今世紀に入り、縄文遺跡群の世界文化遺産登録推進運動、縄文文化による町興し、土偶ブームなど「縄文文化の現代的利用」と呼び得る多様な関心が考古学界のみならず一般社会においても生じている。本研究が各地の遺跡や博物館における実地調査を中心とする文化人類学的調査を通じて明らかにしたのは、縄文文化のナショナルな単一性が広く当然視される一方で、草の根レベルのローカルな縄文文化(の遺跡や遺物)への愛着が見られ、そこに縄文時代の文化の地域的多様性つまり縄文文化の複数性の反映を見て取れることである。

研究成果の概要(英文)：Recently in Japan, especially since the beginning of the second decade of this century, there are quite a few cases of making use of Jomon culture(s) and artifacts from the Jomon era for various purposes: from the promotion of a set of Jomon archaeological sites for the UNESCO World Cultural Heritage List to the growing interest in “dogu” (prehistoric figurines from the Jomon period) among lay people. By means of on-site anthropological fieldwork and online research I made clear multi-layered nature of those cases. On the one hand, one “Japanese nation” inheriting a single Jomon culture is consistently emphasized; on the other hand, local or regional grassroots identities are constructed with reference to cultural diversity in the Jomon period. Therefore, in each individual case, the local, regional or national level Jomon culture is differently foregrounded and articulated with each other in diverse ways.

研究分野：文化人類学

キーワード：縄文文化 先史文化の利用 文化遺産 ローカリティ ナショナルリティ 地域振興

1. 研究開始当初の背景

近年、殊に 2010 年代初頭以降、「縄文文化の現代的利用」と総称できるような動きが日本各地で活発化してきた。ここで言う「縄文文化の現代的利用」とは、現代日本社会の人々が縄文文化(のモノ)に新たな意味を見出し、それと自分たちの生活を結びつけて、さまざまな形で活用する営みであり、考古学と関係をもちながらも、学術的調査研究の枠に収まらない多面性をもっている。それは具体的には、世界文化遺産登録運動や町興しのような行政主導の運動から、縄文文化をテーマとする国内外の展覧会、「東京オリンピック・パラリンピックに火焰型土器様式の聖火台を」という運動、縄文関連商品の開発、土偶ブームなどインターネットを駆使したポピュラーカルチャーにまでおよぶ非常に多岐にわたる同時多発的な社会現象である。そのような縄文時代の文化やモノへの多様な関心が高まってきている状況を、遠い過去の文化に価値を認めそれを現代に蘇らせるという意味で「縄文ルネサンス」とよぶこともできるだろう。本研究では、そうした営みの中で「ローカリティ」(私たちの地域の縄文文化)と「ナショナリティ」(日本文化としての縄文文化)が個々の事例の中でどのように「節合」(articulation)すなわち断絶/連続しているのか、その様態を調査することによって、先史文化の現代的利用という営みの中で「私たち(の文化・伝統)」が(再)構築されている具体的なプロセスに照準を定める。

2. 研究の目的

本研究は近年活発化している「縄文文化の現代的利用」の多面的な実態を、現地調査を中心とする文化人類学的研究によって具体的かつ詳細に明らかにすると同時に、現代社会に生きる私たちが(遠い過去の日本列島を舞台に繁栄した)縄文文化を参照し、縄文文化に言及することによって構築あるいは再構築しようとしている「私たち」「私たちの文化」「私たちの伝統」がどのようなものであるのか、その中でローカリティとナショナリティはどのように節合しているのかを明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

(1)【研究方法の概要】「縄文文化の現代的利用」の具体的実態を詳細に明らかにするために、国内 5 地域を重要拠点として選び、各地域の特色あるプロジェクトを焦点に据えて、行政・経済・文教など多様な領域での活動を対象とするインタビュー中心の文化人類学的実態調査を 5 年間にわたって実施し、各地域で進行中の取組みの経時的变化を詳細に記録するとともに、複合的現象としての「縄文文化の現代的利用」の全容を明らかにする。また海外 2 地点(イギリスおよびブラジル)における補完的な調査によって、「縄文文化の現代的利用」の海外展開、その中でも特に「縄文土器や縄文土偶を用いての日本文化の世界発信」の実態を把握する。さらに以上の現地調査を補完するものとして、関連書籍の文献研究を行うとともに、日常的にインターネット上での縄文関連イベント等に関する情報を継続的にモニターする。

(2)【国内 5 地域における現地調査】(A) 長野県茅野市の国宝土偶を核とする「縄文プロジェクト」関連活動の調査: 国宝土偶 2 点を擁する茅野市の「縄文遺産を生かした町づくり」の実施状況。(B) 新潟県信濃川流域の火焰型土器を核とするプロジェクトの調査: 新潟県の NPO 法人ジョーモネスク・ジャパンの活動、信濃川火焰街道連携協議会の活動、日本遺産『「なんだ、コレは!」信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化』、火焰型土器様式のオリンピック・パラリンピック聖火台をめざす推進運動。(C) 「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界文化遺産登録推進プロジェクトの調査: 北海道・青森県・秋田県・岩手県の 14 市町村の 17 カ所の遺跡の世界文化遺産リストへの登録をめざす運動。(D) 千葉県船橋市の船橋市飛ノ台史跡公園博物館を会場に 2001 年から毎年開催されてきた『縄文コンテンツラリー展』関連プロジェクトの調査。(E) インターネット上あるいはインターネットを介して推進されている広域の縄文関係プロジェクトの調査。

(3)【海外 2 地域における縄文文化発信活動の現地調査】(F) 大英博物館をはじめとするイギリスにおける縄文文化(縄文遺物)の普及をめぐる取組みの調査。(G) リオデジャネイロの総合文化施設をはじめとするブラジルにおける縄文文化に関連する取組みの調査。

4. 研究成果

(1)【新型コロナウイルス流行の本研究への影響】2017 年度から 2021 年度までの 5 か年にわたって実施した本研究にとって、2020 年初春以降の新型コロナウイルスの流行とそれに伴う社会活動に対する規制は大きな阻害要因となった。特に海外調査に関しては、イギリス調査は 2018 年に予定通り無事に実施することができたが、ブラジル調査は実施不可能となった。国内調査に関しては、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置などの合間を縫って綱渡りのようにして何とか一定程度以上の調査を実施することができた。しかし調査対象の遺跡(公園)・博物館等の臨時閉鎖・休館、イベントの中止等が相継いだことによって、予定通りの調査成果を得ることが難しかったことは否めない。他方、地方の遠隔地に位置する博物館や資料館のインターネットを介しての発信の活発化など、パンデミック下の未曾有の事態の下で促進されたプロセスもあり、その点では予期していなかった発見がもたらされたという面もあった。

(2)【実施した現地調査】①船橋市飛ノ台史跡公園博物館における『縄文コンテンポラリー展』ならびに関連事業の調査[『とび博でアートみいーつけた』2017、『とび博 土偶のアート伝説』2018、『遺跡のアート劇場』2019、『とびはくにもぐろう!』2021] 『第0回八ヶ岳 JOMON ライフフェスティバル』ならびに関連事業を中心とする「縄文プロジェクト」の調査[茅野市、2017] 東京国立博物館『フランス人間国宝展』調査[2017] 農と縄文の体験実習館なじょもんにおける『堀江武史作品展 縄文遺物と現代美術』調査[津南町、2018] イギリスにおける先史文化の現代的利用の実態調査[Victoria and Albert Museum, The British Museum, Stone Henge, Tate Modern, 2018] 東京国立博物館における特別展『縄文 1万年の美の鼓動』展調査[2018] 縄文文化の現代的利用に係る映画(『縄文にはまる人びと』と『太陽の塔』)調査[東京・福岡、2018] 「地底の森ミュージアム」および「縄文の森広場」調査[仙台市、2019] 国立歴史民俗博物館における先史・古代展示室の新展示および展示担当者による講演の調査[佐倉市、2019] 東京藝術大学におけるパネルディスカッション『藝大で縄文について語ろう』へのパネラーとしての参加および調査[2019] 岡本太郎記念館における『日本の幻影』展の調査[東京都、2019] 青森県つがる市における調査(木造駅舎、つがる市教育委員会、縄文住居展示資料館カルコ、亀ヶ岡先史時代遺跡、木造亀ヶ岡考古資料室、しろき庵)および青森市における調査(青森県立郷土館、三内丸山遺跡センター、小牧野遺跡保護センター)[2020] 猪風来美術館(新見市)における現代縄文土器制作および展示の調査[2020] 新潟県における調査(新潟市陸上競技場・長岡市立科学博物館・「未来縄文の杜」予定地(長岡市)・農と縄文の体験実習館なじょもん(津南町)・十日町市博物館)[2021] 山梨県における調査(北杜市考古資料館、金生遺跡および梅ノ木遺跡(北杜市)、南アルプス市ふるさと文化伝承館、山梨県立考古館(甲府市)、釈迦堂遺跡博物館(笛吹市)、(株)ピースプランニングおよび田中水晶彫刻所(甲府市))[2021] 千葉県における調査(取掛西貝塚(船橋市)ならびに加曽利貝塚および同博物館(千葉市))[2021] 北海道における調査(キウス周堤墓群(千歳市)、北黄金貝塚および同情報センター(伊達市)、入江貝塚および高砂貝塚および入江高砂貝塚館(洞爺湖町)、大船遺跡および垣ノ島遺跡および函館市縄文文化センター(函館市))[2021]、『大船ノ垣ノ島遺跡と世界遺産』展(函館市立博物館)の調査[2021]、国立民族学博物館『ユニバーサル・ミュージアム』展における触展示調査[吹田市、2021] 『焼物に映し出された美意識の時代的変遷』展(備前市立備前焼ミュージアム)および同館白井館長と陶芸家猪風来氏による講演(備前焼伝統産業会館)の調査(備前市)[2021]、②長野県における調査(長野県立歴史館『全盛期の縄文土器』展(千曲市)、井戸尻遺跡および井戸尻考古館(富士見町))[2021]、③山口県立萩美術館・浦上記念館『海を渡った古伊万里展』および常設展の調査[萩市、2021] ④江戸東京博物館『縄文2021 東京に生きた縄文人』展および江戸東京たてもの園『縄文2021 縄文のくらしとたてもの』展の調査[2021]。

(3)【テーマ別の研究成果】

▶オリンピック・パラリンピック東京大会の波紋：両大会と関連事業(日本博等)を「日本のナショナルな先史文化」としての縄文文化の世界発信の機会とする様々な事業が計画されていたが、延期のうえ無観客という変則的な形態での開催の結果、その多くは事実上水泡に帰すことになった。他方、日本政府が2015年度から開始し2020年までに100件程度の認定を目指していた「日本遺産」(Japan Heritage)も同大会と連動したものととして構想されていたものだが、新潟県による『「なんだ、コレは!」信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化』(2016)および長野県と山梨県による『星降る中部高地の縄文世界 数千年を遡る黒曜石鉱山と縄文人に出会う旅』(2018)という2件の「日本遺産」では、名称にも明らかなように、地域の縄文文化の特色を強調したストーリーが前景化されており、結果として、遺跡や市町村の違いをこえた、縄文時代の「信濃川流域」あるいは「中部高地」のリージョナルな広域文化圏をあらためて実感させる契機となっているとみることができ、今後の展開が注目される。新潟県域の諸団体を推進母体として展開された「オリンピック・パラリンピックの聖火台に火焰型土器様式の聖火台を提案する運動」は実現には至らなかったが、それが一部をなす「火焰土器のクニの復興」をめざす長期的な活動は日本遺産とも連動して継続している。また茅野市(長野県)では、オリンピック・パラリンピックに合わせて2020年秋にトリエンナーレ『八ヶ岳 JOMON ライフフェスティバル』の第1回の開催を予定していたが新型コロナウイルスの蔓延を理由に1年延期され、最終的に中止されることになった。しかし2017年には試行版として第0回が開催されており、そこでは縄文時代中期の人口密集地だった「八ヶ岳山麓」という広域の地域性が前面に押し出されていた。以上のように、新型コロナウイルス流行は、意図せざる結果として、ナショナルな縄文文化よりも縄文文化の地域的多様性の認知を促進するという側面をもつことになったとも言えよう。

▶世界文化遺産登録への道のり：北海道・青森県・秋田県・岩手県が共同で推進してきた「北海道・北東北の縄文遺跡群」のユネスコ世界文化遺産リストへの登録は、2013年の提案から2019年のユネスコへの推薦を経て、2021年夏にようやく実現した。推進運動において繰り返し提起されていたのは「北海道・北東北の一定数の遺跡だけで縄文文化の全体を代表できるのか」という問いであったが、そこにも明らかなように「日本の縄文文化」の普遍的価値を海外で認知してもらうという目標が一貫して前面に出ていた。登録実現後、新型コロナウイルス流行の下では、これまでの国内の世界遺産でのような全国からの観光客の殺到といった事態は生じえなかった

が、登録実現の報道においても、「日本の縄文文化」の国際的な認知を祝賀するという点が前面に出て、当該遺跡群が「日本の縄文文化」を代表するものとして位置付けられており、明らかにナショナリティが前景化されていた。しかしその一方で、一般人の目に触れることはあまりないユネスコへの推薦書においては、当該遺跡群の文化遺産としての一体性の学術的根拠として「津軽海峡文化圏」とよびうる地域的文化の独自性つまり、ローカリティに下支えされたリージョナリティが強調されていた。ここにも明らかな「ナショナルな縄文」と「リージョナルあるいはローカルな縄文」の対比は、実は、今回の世界文化遺産登録という文脈に限定されるものではなく、現代日本社会における「縄文文化」の位置づけを貫く通奏低音とでもいうべきものと言える。すなわち、「1万年間日本列島で連続した縄文時代の日本文化としての縄文文化」という縄文文化像が一般社会では当然視されている一方で、考古学界においては「縄文文化」とは「地域的・歴史的に多様な諸文化の総称」と理解されており、そこには看過しえない齟齬がある。ここに潜んでいるのは、先史時代の(諸)文化を現代のナショナルな文化とどのよう節合するのかという一般問題であり、それは縄文文化の場合に限られる問題ではない。

▶リージョナリティとローカリティの関係の多様性：日本遺産の認定などに随伴して注目すべきものとして縄文遺跡群のリージョナルなネットワーク化の促進の試みがある。一例を挙げれば、諏訪市など長野県の8市町村と甲府市など山梨県の6市が実施母体となっている日本遺産『星降る中部高地の縄文世界 数千年を遡る黒曜石鉱山と縄文人に出会う旅』(2018)に際して、17か所の遺跡・施設が所蔵する33点の土偶(土器を含む)の御朱印を蒐集する『三十三番土偶札所巡り』が考案され、特製の「御朱印帳」も販売されて、縄文文化に関心をもつ観光客が「巡礼」を通じて縄文時代の地域文化圏を体感できるようになっている。同様の試みは山梨県の「縄文王国山梨スタンプラリー」にもみることができ、「北海道・北東北の縄文遺跡群」においても、期間限定で賞品が当たるといったやや違った趣旨ではあるが『道南・青森 縄文「ドキドキ」スタンプラリー』が実施された。こうした企画の注目に値する点は、個々の遺跡や遺物という点を線として繋ぎ、面としての地域的なレベルの縄文文化の独自性を前景化したキャンペーンであることで、その中で教科書の記述にみる「一枚岩の単一の縄文文化」ではない縄文時代の多様な文化圏の存在を一般の人々が体感する機会を提供していることである。以上のようにリージョナルなレベルでの結びつきが強まる傾向がある一方で、ローカルなレベル(各市町村あるいは各遺跡)での取組みが中心となっている事例も少なくない。個々の事例でリージョナルとローカルのどちらに重点が置かれるかは、様々な要因が関与していて単純な結論を示すことはできないが、一例を挙げれば、千葉県は全国有数の貝塚遺跡集積地だが、2017年に(縄文時代の遺跡では)全国で4件目の国の特別史跡に指定された加曾利貝塚を擁する千葉市と、2021年にようやく取掛西貝塚が市内初の国の史跡に指定された船橋市の間では、縄文遺跡活用の取組みにおけるリージョナルな協力は現段階では萌芽的段階にとどまっているようである。そうした状況と部分的に連動しているとみられるが、2001年から船橋市飛ノ台史跡公園博物館で毎年開催されてきた『縄文コンテポラリー展』は、ここ数年、同館収蔵の個々の遺物を参照した作品の制作と展示を促進・奨励する方向へと舵を切り始めている。そうした「サイトスペシフィック」な作品重視に見て取れるのは、「ぼんやりとした縄文文化一般」に留まらない、より解像度の高い「この土地の縄文文化」への関心の高まりである。

▶土偶をめぐる多様な動向：2018年夏に35万人の来場者を集めた東京国立博物館の『縄文 1万年の美の鼓動』展は、縄文スーパースターのナショナルチームすなわち国宝土偶5体の揃い踏みを目玉とするものであったが、遺跡や土器に比べて土偶は個性的外見ゆえにシロウトにも弁別が容易であることも相俟って、しばしば愛称を付けられて、ナショナル、リージョナル、ローカルそれぞれのレベルの縄文文化の表象あるいはアイコンとしても機能している。一例を挙げれば、土偶として最初に国宝に指定された茅野市出土の「縄文のビーナス」は、コンテクストに応じて、日本の、八ヶ岳山麓の、茅野市の、棚畑遺跡の縄文文化の表象となっている。また他方で、「どぐキャラ総選挙」等のインターネット上のコンクールにも例証されるような、個々の土偶に対する個人的愛好によって支えられた「土偶ブーム」とよびうるような盛り上がりもある。そのなかでは、土偶をキャラクター化した「土偶キャラ」も生み出され、それらが各地の「ゆるキャラ」と同様な「ご当地性」を獲得し、デザインとして商品化に結び付くような動きもある。そうした動きも含めて「縄文文化の現代的利用」の一環としての「モノづくり」については2022年度から開始予定の後続の科研費によるプロジェクトでさらに分析を進める予定である。

▶縄文を核とするインターネット上の交流スペース：新型コロナウイルスの蔓延は結果として、博物館などによるSNSを活用した発信を拡大加速化し、交通の不便な土地にあるために遠方からのアクセスが難しかった遺跡や遺物を身近なものにするのに大きく貢献したとみられる。しかし、それは他方で、遺跡間の距離の遠近の認識を希薄化し、縄文文化の地域的な広がりや違いを実感することを困難にしたという面もあったであろう。また、パンデミックの下での移動制限と行動制限によって、縄文愛好家のSNSを介しての交流が活発化したことは明らかであり、それらは物理的距離によって阻害されない広域的結びつきを強化するという効果があった一方で、詳細な検証は難しいが、「縄文まつり」などにおける対面的交流によって醸成されていた「地元の縄文」への愛着を弱める効果もあったと思われる。以上のようにインターネットが促進した縄文ファンの交流は全国規模で広がっているが、それはリゾーム状の結びつきであり、一枚岩の縄文文化、言い換えれば「我国の縄文文化」という文化ナショナリズムとは性格をはっきりと異なるものだと考えられる。

(4) 【研究成果の総括】縄文時代には現在存在するようなネーションとしての日本人の社会は存在しなかったにもかかわらず、教科書の記述に代表される一般社会の縄文イメージにおいては、「日本列島を舞台に1万年以上連続した縄文文化」と一口に言われ、「ナショナルな縄文文化」の単一性・斉一性・均質性が当然のことのように強調される。しかし縄文時代の文化は時期的にも地域的にも千差万別だったのであり、リージョナルあるいはローカルな縄文文化の複数性・多様性を忘れることはできない。本研究が照準する「縄文文化の現代的利用」という非常に多様な営為においても、この単数性と複数性が、複雑なかたちで影を落としている。両者は単純に対立するのではなく重層化している。つまり人々の思い描く縄文文化のなかでローカル・リージョナル・ナショナルが層をなしており、文脈や場面に応じてそのいずれかが他より前景化する。世界遺産といった文脈では、ほとんど自動的にナショナルなレベルすなわち「縄文時代の日本文化」としての縄文文化が前景化され、その内的多様性は後景に退くことになる。他方、それぞれの土地の個々の遺跡を舞台とする市町村の縄文まつりや郷土教育としての縄文学習などで前景化するのはローカルなレベルの「個性的な我が郷土の縄文文化」となる。隣接する複数県の連携が構想される際には、縄文時代に類似した様式の土器を製作していた地域圏を際立たせるリージョナルなレベルが参照されることになり、個々の土偶の個性に光を当てる SNS 上の交流では、3つのレベルのいずれもが背景に退いて、個々の遺物のオブジェとしての個別性が前面に出てくる蓋然性が高い。このように縄文文化の単数性（均質な共通文化）と複数性（多様な地域文化の集合）のうち、「縄文文化の現代的利用」の個々の事例において、それぞれ違った側面が選択されて焦点化されているのだが、そこに見られる違いは、縄文時代の文化の時期的そして地域的な多様性を反映するものであると同時に、縄文文化のなかに新たな価値を発見する現代の私たちの願望の多様性を反映するものでもあると言えよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 古谷嘉章	4. 巻 20
2. 論文標題 時を超えた縄文との対話	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『第20回縄文コンテンツポラリー展inふなばし』カタログ	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 古谷嘉章	4. 巻 19
2. 論文標題 不在のものの現前：廃墟・劇場・仮面	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『第19回縄文コンテンツポラリー展inふなばし』カタログ	6. 最初と最後の頁 34-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 FURUYA Yoshiaki	4. 巻 19
2. 論文標題 Presentation of the Absent: Ruins, Theaters, and Masks	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『第19回縄文コンテンツポラリー展inふなばし』カタログ	6. 最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 古谷嘉章	4. 巻 第18回
2. 論文標題 土偶のなかに現代が見える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『第18回縄文コンテンツポラリー展inふなばし』カタログ	6. 最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 古谷嘉章	4. 巻 17
2. 論文標題 ワークショップとしての「縄文コンテンポラリー展」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『第17回縄文コンテンポラリー展 inふなばし』カタログ	6. 最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 古谷嘉章	4. 発行年 2020年
2. 出版社 古小烏舎	5. 総ページ数 253
3. 書名 人類学的観察のすすめ：物質・モノ・世界	

1. 著者名 古谷嘉章	4. 発行年 2019年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 289
3. 書名 縄文ルネサンス：現代社会が発見する新しい縄文	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2019年11月23日（15時～18時）に東京藝術大学上野キャンパス美術学部において先史遺物修復家兼アーティストの石原道知氏（武蔵野文化財修復研究所、東京藝大非常勤講師）および堀江武史氏（府中工房）とともに『藝大で縄文について話そう』というイベントを企画開催し、パネルディスカッションの報告者として登壇し「縄文ルネサンスにおけるアート」という演題で報告を行った。同イベントでは、縄文考古学の重鎮である小林達雄氏（國學院大學名誉教授）をはじめとして、縄文文化の現代的利用に関わる多くの方々の参加を得て、報告およびディスカッションを通じて、現況について幅広く深い理解を得ることができた。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------